

OPEN MIDDLEWARE

グループ全体の基幹システムをSAP® R/3®で再構築 膨大な数のジョブ運用をJP1によって自動化



日本航空株式会社
ITセンター マネージャ
安達 靖人氏

日本航空株式会社

2002年10月、日本航空株式会社(以下、JAL)と株式会社日本エアシステム(以下、JAS)の株式会社日本航空システム設立のもとでの経営統合による新「JALグループ」が誕生。ここでは2000年から「企業のあらゆる側面をe化する」という目標を掲げ、「e-JAL」と呼ばれるプロジェクトが進められてきた。その一環として基幹系システムもSAP® R/3®で再構築、グループ全体を支える業務基盤が確立されている。このシステムのジョブ運用基盤として利用されているのが日立の統合システム運用管理ミドルウェア「JP1」である。SAP® R/3®上のジョブ運用を自動化するのはもちろんのこと、メインフレームとのジョブ連携も実現。柔軟性の高いシステム基盤を実現する上で、重要な役割を果たしているのである。

ビジネスの全面的なe化をめざし 業務基盤をSAP® R/3®で再構築

企業グループ全体のリソース活用をいかにして最適化していくか。これはある程度の規模を持つ企業グループにとって、極めて重要な経営課題のひとつだといえる。企業グループが大きくなれば利用可能なリソースの総量が大きくなる一方で、企業間の壁が情報の流れを妨げ、組織全体を見通すことが難しくなっていく。これによってリソースの利用効率さが下がるリスクが生じ、グループ全体の競争力を低下させる可能性もある。

この課題に対応するための手段として、IT活用を積極化しているのがJALグループである。「企業グループのあらゆる側面をe化する」ことを目指し、2000年から「e-JAL」と呼ばれるプロジェクトを進めているのだ。

まずは一般社員のワークスタイルをITで支援する「e-Workstyle」と呼ばれるシステムを構築、電子メールや社員ディレクトリ、情報の電子化・共有化、Webをベースにしたeラーニング、意思決定ワークフローなどを立ち上げていく。

その一方で基幹業務システムに関しても、従来は個々の企業毎に構築されていたものをグループ全体で統合されたものへと移行。標準的なユーザー・インタフェースと統合データベースをERPによって実現したシステムを、2002年4月から本番稼働している。ERPパッケージとしてはSAP® R/3®を採用。財務会計(FI)、管理会計(CO)、在庫/購買管理(MM)、人事管理(HR)、連結(ECCS)、電

子購買(EBP)、データウェアハウス(BW)といったモジュールを利用し、1インスタンスでマルチカンパニーをサポートしている。

さらにこの上には「e-Office」と呼ばれる業務アプリケーションが構築され、サブライサイドにはe-CSM、カスタマサイドにはe-CRMが置かれている。これによって調達から顧客サービスに至るまで一貫したプロセス最適化を実現。企業間の壁を取り除くと同時に、従来は各企業が行ってきたシステム・メンテナンスの負担の軽減にも成功しているのだ。

SAP® R/3®で構築された業務基盤は、グループ全体の業務を支える存在であるため、極めて高い信頼性が必要であることは言うまでもない。求められたサービスレベルは24時間365日の連続稼働。これは航空会社の生命線ともいえる予約システムや運行システムと同レベルなのである。

ジョブ運用の自動化をJP1で実現 決め手はメインフレームとの連携

「このサービスレベルを実現するには、当然ながらシステム運用に関しても高いレベルが求められます」というのは、JAL ITセンターマネージャ 安達 靖人氏だ。

例えば、ファシリティに関してはメインフレームと同じ機械室に設置することが前提となり、専用ラックや電源の二重化も求められた。また保守に関してもベンダーの保守員が常駐し、性能監視や変更管理、セキュリティ、バックアップなども統合管理ツールによって自動的かつ確

USER PROFILE

日本航空株式会社

本社：東京都品川区東品川2-4-11 JALビル
創業：1951年8月
資本金：1,885億5,033万円
従業員数：16,486名(2002年5月末現在)
URL：<http://www.jal.jp/>
事業概要：2002年10月2日、日本航空株式会社と株式会社日本エアシステムの株式会社日本航空システム設立のもとでの経営統合による新「JALグループ」が誕生。「総合力ある航空輸送グループとして、お客さま、文化、そしてところを結び、日本と世界の平和と繁栄に貢献する」という企業理念のもと、国内線利用者利便の一層の向上と国際競争力強化を目指す。



